



半七捕物帳 07

# 奥女中

岡本綺堂



青空文庫

青空  
文庫

半月ばかりの避暑旅行を終つて、わたしが東京へ帰つて来たのは八月のまだ暑い盛りであつた。ちつとばかりの土産物を持って半七老人の家をたずねると、老人は湯から今帰つたところだと云つて、縁側の蒲筵がまじざのうえに大あぐらで団扇をばさばさ遣つかつていた。狭い庭には夕方の風が涼しく吹き込んで、隣り家の窓にはきりぎりすの声がきこえた。

「虫の中でもきりぎりすが一番江戸らしいもんですね」と、老人は云った。「そりゃあ値段も安いし、虫の仲間では一番下等なものかも知れませんが、松虫や鈴虫より何となく江戸らしい感じのする奴ですよ。往来をあるいていても、どこかの窓や軒できりぎりすの鳴く声をきくと、自然に江戸の夏を思い出しますね。そんなことを云うと、虫屋さんに憎まれるかも知れませんが、松虫や草雲雀くさひばりのたぐいは値が高いばかりで、どうも江戸らしくありませんね。当世の詞ことばでいうと、最も平民的で、それで江戸らしいのは、きりぎりすに限ります

よ」

老人はしきりに虫の講釈をはじめて、今日では殆どこんにち

子供の玩具おもちゃにしかならないような一匹二錢ぐらいの

きりぎりす

蟋蟀を大いに讚美していた。そうして、あなたも虫を

飼うならきりぎりすを飼ってくださいと云った。虫の話がすんで風鈴の話が出た。それから今夜は新暦の八月十五夜だという話が出た。

「暦が違いますから八月でもこの通り暑うござんすよ。

これが旧暦だと朝晩はぐつと冷えて来るんですがね」

老人は又むかしのお月見のはなしを始めた。そのう

ちにこんな話が出て、わたしの手帳に一項の記事をふやした。

文久二年八月十四日の夕方であつた。半七がいつもより早く家へ帰つて、これから夕飯をすませて、近所の無尽へちよいと顔出しをしようと思つてみると、小さい丸鬚に結つた四十ばかりの女が苦勞ありそうな顔を見せた。

「親分。どうも御無沙汰をいたして居りました。いつも御機嫌よろしゅう、結構でございます」

「おお、お亀さんか。久しく見えなかつたね。お蝶坊も好い新造しんぞになつたらう。あの子もおとなしく稼ぐよ  
うだから阿母おつかあもまあ、安心だ」

「いえ、実はそのお蝶のことに就きまして、今晚お邪魔にあがりましたのでございますが、どうもわたくし共にも思案に余りましてね」

四十女のひたいの皺をみて、半七は大抵想像がついた。お亀は今年十七になるお蝶という娘を相手に、永代橋きわの際に茶店を出している。お蝶は上品な美しい娘で、すこし寡言むくちでおとなし過ぎるのを疵にして、若い

客をひき寄せるには十分の価あたをもつていた。お亀もこの美しい娘を生んだことを誇りとしていた。その娘について何か苦勞が出来たといえ、半七でなくても大抵の見当は付く。親孝行のお蝶が親よりも更に大事な人を見付けだしたという紛糾いざこざに相違ない。稼業が稼業だけに、それをやかましく云うのも野暮やぼだと半七は思つた。

「じゃあ、なんだね。お蝶坊が何かこしらえて、阿母に世話を焼かせるというわけだね。まあ、ちつとぐらいのことは大目おおめに見てやる方がいいぜ。若い者のこつた、



ちつとは面白いこともなけりやあ稼ぐ張り合いがねえ  
というもんだ。阿母だつて覚えがあるだろう。あんま  
りやかましく云わねえがよかろうぜ」と、半七は笑つ  
ていた。

お亀は莞爾にこりともしないで、相手の顔をじつと見つめ  
ていた。

「いいえ、おまえさん。なかなかそんな訳じやござい  
ませんので……。なに、情夫おとこでもこしらえたとかいう  
ような浮いたお話なら、おつしやる通り、わたくしも  
大抵のことは大目に見て居りますけれども、どうもそ

れがまことに困りますので……。当人もふるえて泣いて居りますような訳で……」

「おかしな話だな。一体そりやあどうしたというんだね」

「娘がときどき影を隠しますので……」

半七はやはり笑って聴いていた。若い茶屋娘が時々影をかくす——そんなことは殆ど問題にならないというような顔をしているので、お亀もすこし急せぎ込んだ。

「いいえ、それが情夫や何かのこととはまるで訳が違

いますので……。まあお聴きくださいまし。丁度この五月の川開きの少し前でございました。一人のお供を連れた立派なお武家がわたくしの店のまえを通りかかりまして、ふと店にいる娘を見ましてふらふらと店へはいつて来たんでございます。それからお茶を飲んでしばらく休んで、お茶代を一朱置いて行きました。まことに好いお客様でございます。それから三日ほど経つと、そのお武家がまたお出でになりましたが、今度は三十五六ぐらいの品の好い御殿風の女の方と一緒でございました。どうも御夫婦ではないようでした。そ

うして、その女の方がお蝶の名を訊いたり、年をきいたりして、やっぱり一朱のお茶代を置いて行きました。それから又三日ばかり経ちますと、お蝶の姿が見えなくなつたんでございます」

「むむ」と、半七はうなずいた。

かれらは一種のかどわかしで、身分のありそうな武士や女に化けて来て、容貌のきりよういい娘をさらって行つたに相違ない、と半七は鑑定した。

「娘はそれぎり帰らねえのかえ」

「いいえ。それから十日とおかほど経つと、夕方のうす暗い

時分に真つ蒼な顔をして帰つて来ました。わたくしもまあほつとして其の仔細を訊きますと、娘が最初に姿を隠しましたのも、やつぱり夕方のうす暗い時分で、わたくしが後に残つて店を片付けておりまして、娘は一と足先へ帰りますと、浜町河岸はまちようがしの石置き場のかげから、二、三人の男が出て来まして、いきなりお蝶をつかまえて、猿轡さるくつわをはめて、両手をしばつて、眼隠しをして、そこにあつた乗物のなかへ無理に押し込んで、どこへか担いで行つてしまつたんだそうでございます。娘も夢中で揺られて行きますと、それから何処をどう

行つたのか判りませんが、なんでも大きな御屋敷のようなところへ連れ込まれたんだそうで……。それも遠いか近いか、ちつとも覚えていなかつたそうでございます」

お蝶はそれから奥まつた座敷へつれて行かれた。三、四人の女が出て来て、かれの眼隠しや猿轡をはずして、両手の縛めいましをも解いてくれた。やがてこの間の女が出て来て、さぞびつくりしたろうが、決して案じることもない、怖がることもない、唯おとなしくして、わたし達の云う通りになつていれば好いと、優しくいた

わつてくれた。年の若いお蝶はただおびえているばかりで、ほかほか 捗々しい返事もできないのを、女はなおいろいろ慰めて、まずしばらく休息するがいいと云つて、茶や菓子を持って来てくれた。それから風呂へはいれと云つて、ほかの女たちに案内させた。お蝶はやはり夢中で湯殿へ行つた。

風呂が済むと、また別の広い座敷へ案内された。そこには厚い美しい座蒲団が敷いてあつた。床の間の花瓶には撫子なでしこがしおらしく生けてあつて、壁には一面の琴が立ててあつたが、もう眼が眩くらんでいるお蝶には何

がなにやら能くもわからなかつた。

この間の女が再び出て来て、お蝶に髪をあげると云つた。ほかの女たちが寄つて彼女の髪をゆい直すと、今度は着物を着かえろと云つた。女たちがまた手伝つて、衣桁いこうにかけてある艶あでやかなお振袖を取つて、お蝶のすくんでいる肩に着せかけた。錦のように厚い帯をしめさせた。まるで生まれ変つたような姿になつて、お蝶は自分のからだの始末に困つて唯うつとりと突つ立っていると、女たちは彼女の手をひいて座蒲団のうゑに押し据えた。それから経脚のようになってゐる小



さい机を持ち出して来て彼女のまえに置いた。机のうえには二、三冊の立派な本がのせてあつた。女たちは更に香炉を持って来て机のそばへ置くと、うす紫の煙がゆらゆらと軽く流れて、身にしみるような匂いにお蝶はいよいよ酔わされた。秋草を画いた絹行燈がおぼろにとぼされて、その夢のような灯の下に彼女も夢のような心持でかしまつていた。

女たちは一冊の本を机の上にひろげて、お蝶にすこし俯向いて読んでいろと云つた。魂はもう半分ぬけているようなお蝶は、なにを云われても逆らう気力はな

かった。かれは人形芝居の人形のように、他人の意志のままに動いているよりほかはなかつた。彼女はおとなしく本に向つていると、さぞ暑かろうと云つて、一人の女が絹団扇で傍から柔かにおおいでくれた。

「口を利いてはなりませんぞ」と、このあいだの女がそつと注意した。お蝶はただ窮屈そうに坐つていた。

やがて縁伝いに軽い足音が静かにきこえて、三、四人の人がここへ忍んで来るらしかつたが、顔をあげてはならないと、この間の女がまた注意した。そのうちに縁側の障子が音も無しに少しあいたらしく思われた。

「見てはなりませんぞ」と、女はおどすように小声でま  
た云った。

どんな恐ろしいものが窺っているのかと、お蝶はい  
よいよ身をすくめて、ただ一心に机を見つめていると、  
障子は再び音も無しにしまつて、縁側の足音はしだいに遠  
くなつてゆくらしかった。お蝶はほつとすると、  
腋の下から冷たい汗が雨のように流れ落ちた。

「御苦勞でありました」と、女はいたわるように云った。  
「もう当分は打ちくつろいでいてもよからう」

今まで薄暗かつた行燈の灯はかき立てられて、座敷

は俄かに明るくなつた。女たちが夜食の膳を運んで来た。時分をすぎてさぞ空腹ひもじかつたであろうと女たちが丁寧<sup>ていねい</sup>に給仕して、お蝶は蒔絵の美しい膳のまえに坐らせられたが、かれは胸が一ぱいに詰まっているよう<sup>よう</sup>で、なんにも咽喉のどへ通りそうもなかつた。かずかず列べられた見事な御料理にも彼女は碌々箸をつけなかつた。ともかくも食事が済むと、また少し休息するがよからうと云つて、このあいだの女はしずかにその席を起つた。ほかの女たちも膳を引いてどこへか消えてしまつた。

たった一人そこに取り残されて、はじめて幾らかの人心地のついたお蝶は、どう考えても夢のようで何かなにやら見当が付かなかつた。もしや狐に化かされていゝるのではないかとも思つた。一体この人達は、どういゝう料簡で自分をここへ連れて来て、美しい着物をきせて、旨いものを食わせて、こんな立派な座敷に住まわせて、みんなが大切そうに侍かしずいてくれるのである。芝居や浄瑠璃にあるように、わたしを誰かの身代りにして首でも打つて渡すのではあるまいか、とお蝶はまた疑つた。

なにしろ、こんな薄気味の悪いところは一刻も早く逃げ出したいと思つたが、どこからどう抜け出しているか、彼女にはとても方角が立たなかつた。

「庭へ出たらどこか逃げ路が見付かるかも知れない」

お蝶は一生の勇気をふるい起して、息を殺しながらそろりそろりと滑すべつこい畳の上を忍んであるいた。ふるえる手先が障子にかかると、出会いがしらに一人の女がはいって来た。お蝶ははつと立ちすくむと、便所はばかりならば御案内すると云つて彼女が先に立つて行つた。縁側へ出ると広い庭が見えた。月のない夜で、真つ暗

な木立のあいだに螢のかげが二つ三つ流れていた。遠いところで梟ふくろうの声もさびしく聞えた。

もとの座敷へ帰つてくると、いつの間にか其処には寢床が延べられて、雁かりがね金を繡ぬつた真つ白な蚊帳かやが涼しそうに吊つてあつた。このあいだの女がまた何処からか現われた。

「もうお休みなさるがよい。ことわつて置きますが、たとい夜なかにどんなことがあつても、かならず顔をあげてはなりませんぞ」

手を取るようにして蚊帳のなかへ押し込まれて、お

蝶は雪のように白い衾よぎにつつまれた。どこかで四ツ（午後十時）の鐘がひびいた。幽霊のような女たちは足音もせずに再びそつと消えてしまった。

その晩がおそろしかった。



神経のふるえてお蝶はとても安々と寝つかれる筈はなかつた。生まれてから一度も寝たことのない衾や蒲団の柔か味が、却つてかれに異様の肌障りをあたえて、ふわふわと宙に浮いているような一種の不安を感じさせた。おまけに其の晩は蒸し暑かつたので、かれの額や首筋には粘ねばるよう気味の悪い汗がにじみ出した。お蝶は長い紅い総ふきのついでに、幾た

びか重い頭の置きどころを取り替えてみた。

そのあいだに何刻ほどなんどき経ったか。かれは固もとより記憶していなかっただが、唯さえ静かな家中がしんとして、夜ももう余ほど更けているらしいと思う頃に、次の間の畳を滑るような足音が微かに響いた。お喋は惣身そうみの血が一度に凍るように感じられて、あわてて衾を深くかぶつて枕の上に俯伏してしまふと、墨塗りの縁ふちをつけた大きい襖がさらりとあいたらしく思われて、着物の裾を永く曳いているような響きが枕に薄く伝わった。お喋は息をのみ込んでいた。

はいつて来たものは薄暗い行燈の傍わきにすうと立って、白い蚊帳越しにお蝶の寝顔を覗いているらしかった。

生き血を吸いに来たのか、骨をしやぶりに来たのかと、お蝶はもう半分死んだもののようになって、一心に衾の袖にしがみ付いていると、やがてその衣摺きぬずれの音は次の間へ消えて行つたらしかつた。怖い夢から醒めたように、お蝶は寝衣ねまぎの袂で額の汗をふきながらそつと眼をあいて窺うと、襖は元のように閉まつていて、蚊帳のそとには蚊の鳴き声さえも聞えなかつた。

明け方になつて陽気がすこし涼しくなると、宵から

の気疲れでお蝶はさすがにうとうとと眠った。眼がさめると枕もとにはゆうべの女たちが行儀よく控えていて、さらにお蝶の着物を着替えさせてくれた。蒔絵の手水盥ちようずだらひを持って来て顔を洗わせてくれた。あさ飯が済むと、このあいだの女がまた出て来た。

「さぞ窮屈でもあろうが、もう少しの辛抱でござりませぬ。退屈であろう、ちつとお庭でも歩いてみませぬか。わたし達が案内します」

女たちに左右を取りまかれて、お蝶は庭下駄をはいて広い庭に降りた。植込みの間をくぐってゆくと、そ

こには物凄いような大きい池が青い水草を一面にうかべて、みぎわには青い芒すずきや葦が伸びていた。この古池の底には大きい鯰なますの主ぬしが住んでいると、一人の女が教えてくれたのでお蝶はぞつとした。

「しッ」と、例の女が急に注意をあたえた。「池の方を見ておいでなさい。傍視わきみをしてはなりませんぞ」

何者かが何処かで自分を窺うかがっているのだと気がついて、お蝶も急に身を固くした。主のひそんでいるという恐ろしい池を覗いたまま、彼女はしばらく突っ立っていると、やがてその警戒も解けたらしく、女た

ちはまた打ちくつろいでしずかにあるき出した。

もとの座敷へ戻ると、お喋はまた一刻いっときばかりの休息をあたえられた。女たちは草双紙などを持って来て貸してくれた。午飯がすむと、一人の女が来て琴をひいた。六月はじめの暑い日に、決して縁側の障子をあけることは許されなかつた。襖も無論に閉め切つてあつた。お喋は体ていの好い座敷牢のようなありさまで長い日を暮した。夕方になると、ゆうべの通りに湯殿へ案内されて、帰つてくると今夜は別の着物に着かえさせられた。あかりがつくと、机の前にまた坐らせられた。

今夜は誰も忍んで来て窺っているらしい様子は見えなかつたが、それでもお蝶はまだまだ油断ができなかつた。

「今夜もまた何か来るかしら」

おびえた魂をかかえて、彼女は今夜も四ツ頃から蚊帳にはいると、その晩は宵から細かい雨がしとしと降り出して池の蛙がしきりに鳴いていた。お蝶はやはり眠られなかつた。夜もだんだんに更ふけて来たと思われれる頃になると、自然か、人の仕業しわざか、枕もとの行燈がしだいにうす暗くなつて来たので、お蝶は眼をかす

かに明いてそつと窺うと、白い襖から抜け出して来たような一種の白い影が、白い蚊帳のそとをまぼろしのようになり立ち迷っていた。

「あ、幽霊……」と、お蝶は慌てて衾をかぶってしまった。そうして、ふだんから信仰する観音様や水天宮様を口のうちに一心に念じていた。小半刻も経つてから彼女は怖々のぞいて見ると、白いまぼろしはいつか消えていて、どこかで一番鶏の鳴く声がきこえた。

夜があけると、すべてきのうの通りに、顔を洗って、髪をあげて、化粧をして、あさ飯が済むと庭へ連れ出



された。夜になると、机のまえに坐らせられて、蚊帳にはいると、今夜も幽霊のようなものが枕もとへ迷つて来た。そうした窮屈と恐怖とに夜も昼も責められて、それが七日八日とつづくうちにお蝶は自分が幽霊のように痩せ衰えて来た。

「こんな苦しみをするくらいならば、いつそ死んだほうがましだ」

彼女はしまいにはこう覚悟して、このあいだの女にむかつて是非一度は家へ帰してくれと泣いて頼んだ。女もひどく困ったらしい顔をしていたが、悪くすると

古池へ身でも投げそうなお蝶の決心に動かされたらしく、十日目の夕方には、とうとう一旦は帰れという許可をあたえた。

「併しこの事は決して他言はなりません。またそのうちに迎いに行くかも知れませぬが、その時はどうぞ来てくれるように……。今から頼んで置きますぞ」

さもなければ帰すことはならないと云うので、お喋もよんどころ無しに承知して、きつとまたまいりますと心にもない誓いを立てた。女はいろいろ心配をかけて気の毒であつたと云つて、奉書の紙につつんだ目録

をくれた。日が暮れてあたりが薄暗くなつた頃にお蝶は目隠しをさせられた。口には猿轡を食<sup>は</sup>まされた。来た時とおなじような乗物に乘せられた。人通りの少ないところを選んで浜町河岸まで揺られてくると、石置き場のまえで彼女を乗物からおろして、空<sup>から</sup>の乗物をかついだ男達は逃げるように何処へか立ち去つた。

お蝶は狐が落ちた人のようにぼんやりと突つ立っていたが、急にまた何だか怖くなつて一散にかけ出して、家へ駆け込んで母の顔を見るまでは、彼女もまだ半分は夢のような心持であつた。狐に化かされたのだらう

とお亀は云つたが、ふところに入れて来た目録は木の葉ではなかつた。迷子札まいごふだのような新しい小判がまさに十枚はいつていた。

「まあ、十両あるよ」と、お亀は眼をまるくして驚いた。いくら正直でも慾のない人間はすくない。この頃の相場では、妾奉公をしても月一両の給金はむずかしいのに、別になにをするでも無しに、美しい着物を着せられて、旨いものを食わされて、一日一両の手間賃になる。こんなありがたい商売はないとお亀は喜んでいたが、お蝶は身ぶるいして忌いやがつた。一両はさておいて、

一日十両の給金を貰つてもあんな怖いところへ二度とゆくことはまっぴらだと、かれはその後半月ばかりは病人のような蒼い顔をして暮していた。小判の顔をみてお亀も一旦は喜んだものの、よくよく考えてみると彼女もなんだか不安になつて来た。お蝶が忌がるのも無理はないと思われた。

「十両の金があれば店は閑ひまでも困らない。おまえはまあ当分は家に隠れていて、店へ顔を出さない方がよろうよ」

いつまた連れに来るかも知れないという懸念があつ

たので、お亀は娘を店へ出さないことにした。すると、その月の末の夕方に、お亀が店をしまつてくると、留守番をしている筈のお蝶が姿をかくしていた。近所で訊いても誰も知らないと言つた。かならずこの間のことろに連れて行かれたことと察したが、そのゆく先はもとより判らなかつた。お亀は思案ながらに其の日その日を送つていると、今度も十日目にお蝶はぼんやり帰つて来た。ふところにはやはり十両の目録包みを持つていて、すべてがこの間の話をくり返すに過ぎなかつた。

「なるほど、好い商法のようにだが、こいつはちつと変だね。お蝶坊が忌がるのも無理はねえ」と、この不思議な話を聞いて半七はひたいに小皺をよせた。

「すると、先月の末から娘がまた見えなくなつたんでございます。いつもわたくしの留守を狙つて来て、否応なしに担いで行つてしまふんだそうで……。外へ出れば乗物が待つていて、眼かくしをして乗せて行くんですから、どこへ連れて行かれるのか見当が付きません」

「そこで今度も無事に帰つて来たのかい」

「いいえ。それが帰つて来ませんの」と、お亀は顔を陰らせた。「今度はもう十日の余になりますけれども、何のたよりもございませんで、わたくしもいろいろ心配しておりますと、けさ早くに一人の女がわたくしの家へ見えまして……。それはこの間の御殿風の女でございます。仔細あつて娘を当分は音信不通の約束でこちらへ貰いたいと、こう云うんです。勿論、その代りに二百両の金を渡すというんですが、わたくしもまことに困りましてね。何んぼわたくしだつて、可愛い娘を金で売るわけにはまいりません。まして娘があれば



ど忌がつているものを、あんまり可哀そうでもござい  
ますから、一旦は断わりましたんですけれど、相手の  
方はなかなか承知しないんでございます。無理でもあ  
ろうが肯きいてくれと、立派なお女中が手をついて頼む  
んでしよう。わたくしも実に当惑してしまいました、  
なにしろすぐに御返事はできないから、まあ一日二日  
考えさせてくれと申して、ようようその人を帰したん  
でございましてが……。ねえ、親分さん。こりやあまあ、  
一体どうしたもんでございましょう」

お亀は声をふるわせて、いかにも途方に暮れている

らしかった。

「そりやあ心配だろうね。今の話の様子じゃあ相手はいずれ大きい御旗本か御大名だろうが、なぜそんなことをするんだらう。茶店の娘だつて容貌きりようのぞみで大名の御部屋様にもなれねえとも限らねえが、それなら又そのように打ち明けて召し抱えの相談もありそうなんだが、少し理窟が呑み込めねえな」と、半七はしばらく考えていた。「それになにしろ肝腎の玉が向うに

引き揚げられているんじゃないやあ、どうにもならねえ。おまけにその屋敷もどこだか判らねえじや手の着けようがねえ。困ったもんだ」

半七に腕を組まれて、お亀はいよいよ頼りのないような顔をしていた。

「娘がこれぎり帰つて来ませんようだつたら、どうしましよう」と、彼女は二、三度も水をくぐつたらしい銚子縮ちぢみで眼を拭いていた。

「だが、その御守殿風の女とかいいうのが、いずれ一日二日のうちにまた出直して来るだろうから、ともかくも

俺が行つて、それとなく様子を見てあげよう。その上で又なんとか好い知恵も出ようじゃねえか」と、半七は慰めるように云つた。

「親分がいらしつて下されば、わたくしもどんなに気丈夫だか判りません。では、まことに勝手にましゅうございますが、あしたにもちよいとお出でを願ひとうございます」

お亀はしきりに念を押して頼んで歸つた。あくる日は十五夜で、晴れた空には秋風が高く吹いていた。朝早くから薄すすきを売る声がきこえた。半七は午前ひるまえにほかの

用を片付けて、八ツ（午後二時）頃からお亀の家をたずねた。お亀の家は浜町河岸に近い路地の奥で、入口の八百屋にも薄や枝豆がたくさん積んであった。近所の大きい屋敷のなかでは秋の蟬が鳴いていた。

「おや、親分さん。どうも恐れ入りました」と、お亀は待ち兼ねたように半七を迎えた。「早速でございませうが、娘がゆうべ戻つてまいりましたね」

ゆうべお亀が半七をたずねている留守に、お蝶はいつもの通りの乗物にのせられて、河岸の石置き場まで送りかえされていた。詳しいことは阿母おっかさんに話して

あるから、おまえも家へ一度帰つてよく相談をして来いと、お蝶はかの女から云い聞かされて来たのであつた。

こういう場合に本人を素直に帰してよこすというのは、いかにも物の判つた仕方だ、先方に悪意のないことは能く判つていた。気疲れで奥の二二畳にうとうと眠つてゐるお蝶を呼び起させて、半七は彼女から更に詳しい話を聴きとつたが、やはり確かな見当は付かなかつた。お蝶の話によつて考えると、その屋敷はどうも然るべき大名の下屋敷であるらしく思われたが、そ

の場所も方角も知れないので、それがどこの屋敷だか見当が付かなかつた。

「今に誰か来るかも知れないから、まあ、待っていて見ようよ」と、半七も腰をおちつけて、そこに居坐っていることにした。

この頃の日晷ひあしはよほど詰まつて、ゆう六ツの鐘を聴かないうちに、狭い家の隅々はもう薄暗くなつた。お亀は神酒徳利みきや団子だんごや薄すすきなどを縁側に持ち出してくると、その薄の葉をわたる夕風が身にしみて、帷子かたびら一枚の半七は薄ら寒くなつてきた。殊にもう夕飯の時分に



なつたので、半七はお亀にたのんで近所から鰻を取つて貰つた。自分一人で食うわけにも行かないので、お亀とお蝶の母子にもおやこ食わせた。

飯を食つてしまつて、半七は楊枝をつかいながら縁先に出ると、狭い路地のかさなり合つた庇のあいだから、海のような碧い大空が不規則にしき劃られて見えた。月はその空の上にかかつていながつたが、東の方の雲の裾がうす黄色くかがやいているので、今夜の明月が思いやられた。露はいつの間にか降りているらしく、この頃ではもう邪魔物のように庭さきにほうり出され

ている二鉢の朝顔の枯れた葉が、薄白くきらきらと光っていた。

「みんなも出て拝みなせえ。もうじきお月様があがるぜ」と、半七は声をかけた。

この途端に溝板を踏む足音がきこえて、一人の男がここの格子のまえに立った。お亀がすぐに出てみると、それは見識さむらいらない武士姿であつたが、かれはお蝶母子が家にいることを確かめて、唯今お女中が逢いに來られると伝えて行つた。

「まあ、おれはいない積りにして置いてくんねえ」と、

半七はあわてて草履をつかんで、お蝶と共に奥の三畳にかくれた。そうして襖の隙き間からそつと窺つてみると、やがてはいつてきたのは三十歳前後のやはり奥勤めらしい女であつた。

「初めてお目にかかります」と、女はお亀にむかつて丁寧に挨拶した。お亀もおどおどしながら相当の挨拶をしていた。

「早速でさくじつございますが、こちらの娘のお蝶どのの身上について昨日もほかの御女中がまいつて詳しいお話をいたしました筈。親御も御得心ならば、今夜からす

ぐにお越し下さるように、わたくしがお迎えにまいりました」

女は切り口上で云った。お亀はすこしその威に打たれたらしく、唯もじもじしていて、はつきりした挨拶もできなかつた。

「今さら御不承知と申されては、わたくしどもの役目が立ちませぬ。まげて御承知くださるように重ねておねがい申します」

「娘はゆうべ帰りまして、それからなんだか気分が悪いとか申して、きょうも一日ふせ臥ふせって居りますので、ま

だ碌々に相談いたす暇もございませんで……」

お亀は一寸遁のがれの口上で、なんとか此の場を切り抜けるつもりらしかったが、相手はなかなか承知しなかつた。女は嵩かさにかかつて又云つた。

「いえ、それはなりません。篤とくと御相談くださるよう  
に、昨夜わざわざ戻してあげましたのに、いま以て何  
の御相談もないというは、こちらの志を無にしたよう  
な致され方、それではわたくしはおめおめ引き取るわ  
けにはまいりませぬ。娘御をここへ呼び出して、わた  
くしと三みつ鼎がなえであらためて御相談いたしましょう。お

蝶どののををすぐこれへ」

凜とした声できめ付けられて、お亀はいよいよろたえていると、女は袱紗ふくさにつつんで来た小判のつつみを出して、うす暗い行燈の前へ二つならべた。

「御約束の御手当ては二百両、封のまままで唯今お渡し申します。さあ、どうぞ娘御をこれへ」

「は、はい」

「あくまでも御不承知か。お役目首尾よく相勤めませねば、わたくし此の場で自害でもいたさねば相成りませぬ」

彼女は更に帯のあいだから袋に入れた懐劍ひこみのようなものを把とり出して見せた。その鋭い瞳ひとみのひかりに射られて、お亀は蒼くなつてふるえ出した。掛け合いはもう手詰めになつて来た。

「あの女はおまえ識しっているか」と、半七は小声でお蝶にきくと、お蝶は無言で首を振つた。半七はすこし考みえていたが、やがて三疊から台所へ這みい出して、水口みずぐちからそつと表へぬけた。

路地のそとは月が明るかつた。角から四、五軒さきの質屋の土蔵のまえには、一挺の駕籠かごが下ろされて、

そこには二人の駕籠舁かごかきと先刻の武士らしい男が立っていた。半七はそれを見とどけて、今度は表の格子からはいつて来た。そうして、黙って女のまえに坐った。女は受けあごの細おもてに薄化粧をして、眼の涼しい、鼻のたかい、見るからに男まさりともいいそうな女振りで、髪は御殿風の片はずしに結っていた。

「御免くださいまし」

半七は何げなく挨拶すると、女は黙って鷹揚えしやくに会釈した。

「わたくしはこのお亀みよりの親戚みよりの者でございませうが、う



けたまわりますれば、こちらの娘を御所望とか申すこととで。なにぶんにも婿取りの一人娘ではございますが、それほど御所望と仰しやるからは、御奉公に差し上げまいものでもございません」

お亀はびつくりして半七の顔を見ると、彼はつづけてこう云った。

「勿論、あなたの方にもいろいろの御都合もございませうが、いくら音信不通のお約束でも、せめて御奉公の御屋敷様の御名前だけでも伺って置きたいと存じますのが、こりゃあ親の人情でございませう。どうぞそ

れだけをお明かじ下さいましたら……」

「折角でありますが、御屋敷の名はここでは申されません。ただ中国筋のある御大名と申すだけのことで……」

「あなた様のお勤めは……」

「表使を勤めて居ります」

「左様でございますか」と、半七は微笑ほほえんだ。「では、まことに申しにくうございますが、この御相談はお断わり申しとう存じます」

女の眼はじろりと光った。

「なぜ御不承知と云われます」

「失礼ながら御屋敷の御家風が少し気に入りませんか  
ら」

「異なることを……。御屋敷の御家風をどうしてお前は  
御存じか」と、女は膝をたて直した。

「奥勤めの御女中の右の小指に撥<sup>ほちだこ</sup>胝があるようでは、  
御奥も定めて<sup>みだ</sup>紊れて居りましようかと存じまして」

女の顔色は急に変わった。

「御免くださりませ。たのみます」

格子の外で案内<sup>あない</sup>を頼む女の声<sup>こゑ</sup>がきこえた。

## 四

「お出で遊ばしませ。まあ、どうぞこちらへ」

入口へ出たお亀がうろうろしながら、新しい女客を奥へ招じ入れようとすると、案内を頼んだ女は少しためらっているらしかった。

「どうやら御来客の御様子でござりますな」

「はい」

「では、重ねてまいりましょう」

引つ返そうとするらしい女を、半七は内から呼びかえした。

「あの、恐れ入りますが、しばらくお控えくださいまし。ここにあなたの偽物がまいつて居りますから、どうか御立ち会いの上で御吟味をねがいとう存じますが……」

はじめの女はいよいよ顔色を変えたが、彼女はもう度胸を据えたらしく、急ににやにや笑い出した。

「親分。お見それ申して相済みません。さつきからどうも唯の人でないらしいと思っていました。おまえ

さんは三河町の親分さんでございませうね。もういけません。頭巾をぬぎましようよ」

「そんなことだろうと思つた」と、半七も笑つた。「実は表へまわつて見ると、御大名の御屋敷のお迎いが辻駕籠もめずらしい。奥女中の指には撥胝がある。どうもこれじゃあ芝居にならねえ。おめえは一体どこから化けて来たんだ。偽迎いも偽上使もいいが、役者の好い割にやあ舞台がちつとも栄<sup>は</sup>えねえじゃあねえか」

「どうも恐れ入りました」と、女は頭をすこし下げた。

「この芝居はちつとむずかしかろうと思つたんですが、

まあ度胸でやってみろという気になつて、どうにかこうにか段取りだけは付けて見たんですが、親分に逢つちや敵かないませんよ。こうなりやあみんな白状してしまいますがね。わたくしは深川で生まれまして、おふくろは長唄の師匠をしていましたんです」

彼女の名はお俊と聞いた。母は自分のあとを嗣つがせるつもりで、子供るときから一生懸命に長唄を仕込んだが、お俊は肩揚げの下りないうちから男狂いをはじめ、母をさんざん泣かせた拳句に、深川の実家を飛び出して、上州から信州越後を旅芸者でながれ渡つて、

二、三年前に久し振りで江戸に帰つてくると、深川の母はもう死んでいた。それでも近所には昔の知人が残っているので、彼女はここで長唄の師匠をはじめ、少しは弟子もあつまるようになったが、道楽の強い彼女はとてもおとなしくしていられた。詰まらぬ男に引つかかつて、金が欲しさに女つつもたせ囹もやった。湯屋の板の間もかせいだ。そのうちにお俊はこの近所の魚屋さかなやからふとお蝶の噂を聞き込んだ。

魚屋はお俊が懇意の家で、そこの娘はお亀とも心安くしているので、お蝶がときどきに怪しい使いに誘拐



されてゆくという噂が自然にお俊の耳に伝わった。お蝶の容貌好しきりようをかねて知っている彼女は、この怪しい使いを利用して、娘を更に自分の手へ誘拐しようという悪い料簡を起した。ふだんから自分の手先につかっている安蔵という奴に云いふくめて、二、三日まえからお亀の家の近所をうろついて、内の様子を窺わせているうちに、その屋敷からお蝶を一生奉公にかかえたいという掛け合いに来たことも判った。お蝶がゆうべ戻つて来たことも判った。彼女は安蔵を供の武士に仕立てて、自分は奥女中に化けてお蝶を受け取りに来た

のであった。彼女がお蝶の前にならべた二百両は無論に銅脈の偽物であった。

「なにしろ急仕事の偽迎いだもんですからね。ぐすぐずしていると、ほんものの方が乗り込んで来るかも知れないというので、無暗に支度を急いだもんですから、乗物までは手がまわらないで、飛んだ唯今のお笑い草となつてしまいましたよ」と、お俊はさすがに悪党だけに何もかも思い切りよくしゃべつてしまった。

「それでみんな判つた」と、半七はうなずいた。「お前もこんなことで食らい込んじやあ嬉しくあるめえが、

半七が見た以上は、まさかに御機嫌よろしゅう、はい左様ならと云うわけには行かねえ。気の毒だが一緒にそこまで来て貰おうぜ」

「どうも仕方ありませんよ。まあ、いたわつておくんなさいますし」

併しこんな姿で引つ張つて行かれるのは、乞食芝居のようで困るから、どうぞ家から浴衣ゆかたを取り寄せてくれとお俊は云つた。半七も承知したが、ここではどうにもならないから、ともかくも番屋まで来いと云つて、お俊を引つ立てて出ようとするところへ、さつきから

入口に立っていた女がはいって来た。

「これが表沙汰になりましたは、御屋敷の名前にもかかります。幸いに事を仕損じて誰に迷惑がかかったというでもなし、この女の罪はわたくしに免じてどうか御勘弁を願わしゅう存じます」

女がしきりに頼むので、半七は無下むげに跳ねけ付けることも出来なくなつた。彼は女の苦しそうな事情を察して、とうとうお俊を赦してやることになつた。

「親分さん。どうも有難うございました。いずれお礼にうかがいます」

「礼なんぞに来なくても好いから、この後あんまり手数を掛けねえようにしてくれ」

「はい、はい」

お俊は器量を悪くしてすごすご帰つて行つた。これで偽物の正体はあらわれたが、ほんものの正体はやはり判らなかつた。併しもうこういう破目はめになつては、なまじいに包み隠しても仕方があるまい、いよいよ相手の疑いを増すばかりで、まとまるべき相談も却つて纏まとまらないかも知れないと覺つたらしく、女はお亀と半七にむかつて自分の秘密を正直に打ち明けた。

彼女はお俊のような偽物でなく、たしかに或る大名の江戸屋敷につとめている奥女中であつた。主人の殿様は江戸から北の方にある領地へ帰つてゐるが、奥方は無論に江戸屋敷に残されてゐた。奥方には最愛の姫ひいさま様があつて、容貌きりようも氣質もすぐれて美しいお方であつたが、その美しい姫様は明けて十七という今年の春、疱瘡ほうそう神に呪われて菩提所の石の下へ送られてしまつた。あまりの嘆きに取りつめて母の奥方は物狂おしくなつた。祈祷や療治も効がなかつた。明けても暮れても姫の名を呼んで、どうぞ一度逢わせてくれと泣

き狂うので、屋敷中の者も持て余した。その痛ましさと浅ましきを見るに堪えかねて、用人と老女が相談の末に、姫様によく肖にた娘をどこからか借りて来て、姫様に仕立ててお目にかけてらば、奥方のお気も少しは鎮まろうかということになった。併しそんなことが世間に洩れては御屋敷の恥じである。あくまで秘密にこの役目を仕遂げなければならぬというので、二、三人の人が手わけをして心当りを探してあるいた。

その頃の人には気が長い。そうして、根こんよく探しているうちに、用人の一人が永代橋の茶店で図らずもお蝶

を見つけ出した。年頃も顔かたちも丁度註文通りに見えたので、かれは更に奥女中の雪野というのを連れて来て眼利きをさせた。誰の眼もかわらないで、幸か不幸かお蝶は合格した。

いよいよその本人が見付かると、それをどうして連れてくるかということについて、屋敷内では議論が二つに分かれた。ひとの娘を無得心に連れて来るといふのは拐引かどわかし同様の仕方であるから、内密にその仔細を明かしておとなしく連れてくるがよかろうと云う温和な意見もあった。しかし一方には又これに反対して、な



にを云うにも相手は茶店の女どもである。いくら口止めをして置いても、果たして秘密を守るかどうか頗る不安心である。また後日ごにちにねだりがましい事など云いかけられても面倒である。すこしうしろ暗いやり方ではあるが、いつそ不意に引つさらつてくる方が無事であらう。何事も御家の外聞にはかえられぬと云う者もあつた。結局、後の方の説が勢力を占めて、その役目を云いつけられた武士どもは、身分柄にもあるまじき拐引同様の所行しよくしょうをくり返すことになつたのである。

それほど苦心した甲斐があつて、その計略は見ごと

に成功した。物狂おしい奥方は、替え玉のお蝶を夜も  
昼もときどき覗のぞきに来て、死んだ姫の魂が再びこの世  
に呼び戻されたものと思つてゐるらしく、それから  
忘れたようにおとなしくなつた。併しそれは一時のこ  
とで、お喋の姿が幾日もみえないと、彼女は姫にあわ  
せろと云つて又狂い出した。さりとして人の娘を際限も  
なく拘禁して置くことはできないので、屋敷の者もま  
た困つた。

その矢先に又一つの新しい問題が起つた。それは此  
の年の七月から新しい布ふ達れがあつて、諸大名の妻女も

帰国勝手たるべしということになつたので、どこの藩でも喜んだ。一種の人質ひとじちとなつて多年江戸に住んでゐることを余儀なくされた諸大名の奥方や子息たちは、われ先にと逃げるように国許くにもとへ引きあげた。勿論この屋敷でも奥方を領地へ送ることになつたが、乱心同様の奥方が道中に狂い出したらばどうするか。それがみんなの胸に横たわる苦勞の重い凝塊かたまりであつた。そこで評議がまた開かれた。その評議の結論は、どうしてもお蝶を遠い国許まで連れて行くよりほかはないということに帰着した。

併し今度は殆ど永久的の問題で、さすがに無得心で連れ出すわけには行かないので、ともかくも本人や親許にも相談の上、一生奉公の約束で連れて行くことになった。奥女中の雪野がその使をうけたまわって、きのうも親許へたずねて来たのであった。いつそ最初からあからさまに事情を打ち明けたら、こつちもまた分別のしようがあつたかも知れなかつたが、ひたすらに御家の外聞という事ばかり考えていた雪野は、何事も秘密ずくめで相談をまとめよう<sup>あせ</sup>と焦つていた為に、こつちの疑いはいよいよ深くなつた。おまけに横合い

からお俊のように偽迎いがあらわれた為に、事件はますます纏もつれてしまった。

そのわけを聴いてみると、半七も気の毒になつた。子ゆえに狂う母の心と、その母を取り鎮めようと努めている家来どもの苦心と、それに対しても余りに強いことも云われない破目になつた。

三畳の隠れ家からお蝶はそろそろ這い出して来た。かれは貫い泣きの眼を拭きながら云つた。

「これで何もかも判りました。阿母おっかさん、わたくしのような者でもお役に立つなら、どうぞそのお国へやつ

てください」

「え。ほんとうに承知して行つてくださるか」と、雪野はお蝶の手をとつて押し頂かないばかりにして礼を云つた。

明月は南の空へまわつて来て、庭から家のなかまで一ぱいに明るく映し込んだ。

「おふくろもとうとう承知して、娘を奉公にやることに決めましたよ」と、半七老人は云つた。

「それから又話が進んで来て、いつそ阿母おふくろも一緒に

行つたらどうだということになりました。江戸には近しい親戚も無し、自分もだんだんに年をとつて来るもんですから、お亀も娘のそばに行つた方が好いというりようけん料簡になつて、世帯をたたんで一緒に遠いお国へ行きましたよ。なんでも御城下に一軒の家を持たせて貰つて、楽隠居のようなふうで世を終つたそうです。明治になつて間もなく、その奥方も亡くなつたもんですから、お蝶は初めてお暇いとまが出て、その屋敷から立派に支度をして貰つて、相当の家へ嫁とついだという噂ですが、多分まだ生きていますでしょう。お俊という奴は江戸を

食いつめて駿府すんぶへ流れ込んで、そこでお仕置になったとか聞いています」







半七捕物帳 07 奥女中  
岡本綺堂 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」光文社文庫、光文社  
1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

入力：tatsuki

校正：湯地光弘

1999年6月4日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.2(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ